

道内の新型コロナウイルスの感染状況は六月に入ってから、日中にカラオケを楽しんでいた喫茶店で新たなクラスター（感染者集団）が確認され、感染経路が不明な感染者も見つかると、まだまだ安心できない状態が続く。その一方で、一日当たりの感染者は一〇人以下の日が続き、一定程度の落ち着きは見せつつある。

四月下旬から五月上旬にかけては、連日二〇〜三〇人台の感染が確認され、道民を不安に陥れた。その頃に目の敵にされていたのがパチンコ店だ。道はパチンコ店に対し、新型コロナウイルス特措法二四条に基づき、緩やかな休業要請を行っていたが、営業を継続する店に対し、同法四五条による強い休業要請を行った。それでも応じない店については店舗名などを公表。いったん休業しても営業を再開する店もあり、道とパチンコ店との「いたちごっこ」が繰り返された。

道などはパチンコ店について、密閉、密集、密接の「三密」の状況が生まれやすいと指摘。一方、パチンコ店側は、従業員らの人件費やパチンコ台のリース代などの経費がかさみ、休業すれば経営が傾きかねない店も多かった。道は休業要請に応じた事業者に最大三〇万円の支援金を用意したが、パチンコ店にとっては「焼け石に水」にすぎなかった。

さらに、パチンコ店側には「なぜパチン

コロナと同調圧力

コだけが標的にされるのか」との思いもあった。道の休業要請対象はカラオケボックスやスナック、ネットカフェ、マージャン店など多岐にわたったにもかかわらず、道が店名公表などに踏み切ったのはパチンコ店だけだったためだ。

道が強い姿勢を示した背景には、他県が同様の措置を講じていたことに加え、地域住民から多数の「通報」が寄せられていたこともあった。この間、道や市町村のほか、警察や報道機関などに「あの店が営業していて、たぐさんの客が押し寄せている」「取り締まるべきだ」といった声が寄せられていた。好天に恵まれた五月初旬には、札幌市内の豊平川河川敷でパーベキューをする人の姿が目立ち、「外出自粛の中でけしからん」といった電話も相次いだ。

感染を防ぐためには「三密」を避けることが重要だし、個人的には感染が拡大している最中にパチンコやパーベキューなどに行こうとは思わない。だが、法律の仕組みとして、国や都道府県などがパチンコ店を休業させることはできないし、パーベキューで集まる人を解散させることもできない。そうした状況に不満を思う人たちが「通報」していたのだろう。

全国では個人的な正義感から、休業要請に応じない店の名前をSNS（会員制交流サイト）に投稿したり、店先に警告の張り紙をしたりする人が現れ、「自粛警察」と

いう言葉も生まれた。中には、事実誤認や思い込みから暴走し、店の看板などの破壊や嫌がらせ電話といった犯罪行為に至るケースもあった。

こうした行動が過激化した理由として、感染が収まらずに外出自粛期間が長引き、いらだちが募っていたことが考えられる。「自分は休業要請（外出自粛）に従っているのに、なぜあの店（あいつ）は従わないのか」といった同調圧力、国や都道府県への要請を忠実に守ろうとする「お上意識」もあったかもしれない。

最近少し気になってるのが、マスクだ。街を歩いていると、九割近くの人が着用しているようだ。一方で、呼吸器系の病気がったり皮膚が弱かったりして、マスクを長時間着用できない人もいる。

マスクは飛沫の拡散を防ぎ、ウイルスが付着した自分の手などで顔に触れることも防ぐため、感染防止に有効とされる。だがマスクをしていなくても、会話を控え、せきエチケットなどを守れば、感染を拡大させる恐れは少ない。マスクをしていない人を責めるような目で見える人もいるが、「同調圧力」以外の何物でもないだろう。

これから暑くなる季節。マスク着用で熱中症のリスクも高くなるという。政府も適度にマスクを外すよう呼びかけている。

△魚▽